

たまのよこやま

炎の魔術師現る！



速報!

東京都埋蔵文化財センターの

新しい体験イベント

東京都埋蔵文化財センターでは毎年数多くの体験行事を行っています。
今回はその中でも今年度から新たに始まった企画についてご案内します。

今年ではや3回目となる**縄文ワクワク体験祭り**。
ゴールデンウィーク期間中の5月3日、4日の二
日間にわたって開催されました。

残念ながら今年はいくの雨模様で、多くの行
事は館内で体験していただきました。

勾玉作りやクルミ割り、火起こし体験などの人気
コーナーの他に、今回は新しいコーナーとして**弓矢
体験**が登場しました。



予想以上の人気に担当者もビックリ!!

縄文人の数多くの発明の中でも、弓矢は重要なも
のの一つです。それまでの槍では難しかった、遠く
の獲物や、動きのすばやい獲物を捕らえることが出
来ようになりました。

縄文人が使った弓は丸木弓と言い、木の棒を削っ
て、弦を張っただけの簡素なものです。しかし実際
に作ってみるとこれがなかなか難しく、ちょっと力
を入れすぎると簡単に折れてしまいます。そこで今
回は庭園に生えているマダケを割って弓にしました。
矢も庭園のヤダケを使用。的は段ボールで作った鹿



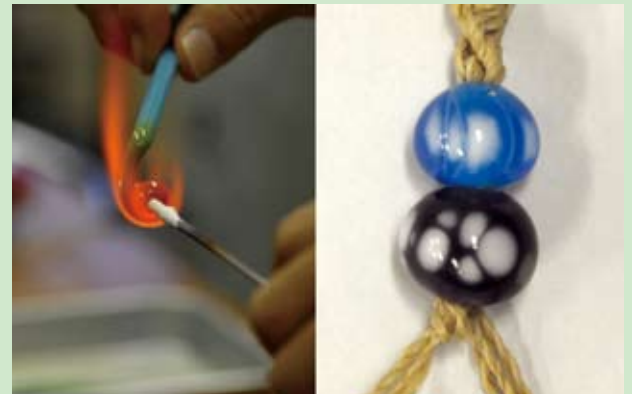
縄文人の格好で弓を引けば気分は本物の縄文人!?

と猪です。^{こくようせき}黒曜石の石鏃^{せきぞく}もつけたい所でしたが、安
全面に配慮して今回は省略しました。^{やじり}鏃を付けてい
ない矢でも、上手に飛ばせば的に突き刺さる威力が
あります。参加者も的の前では真剣そのものの表情、
みごと命中すると歓声が上がりました。

次に紹介するのが「**トンボ玉作り教室**」です。

「トンボ玉」とは装飾を施したガラスビーズのこと。
古いものでは弥生時代の遺跡（長崎県^{い き し は る の つ し}壱岐市原ノ辻
遺跡）からも出土しています。正倉院の宝物の中にも
多数のトンボ玉と、作り方を記した書物や原料も
収蔵されており、奈良時代には製法が伝えられ、国
内で生産されていたと考えられています。その後た
くさんの技法が生み出され、江戸時代には^{かんざし}簪や^{ねつけ}根付
の飾りなどにも使われていました。

センターの行事ではガラスの棒をバーナーで溶か
して棒に巻きつける「巻きつけ技法」でトンボ玉を
作ります（表紙写真）。



ガラスを溶かして棒に巻きつけます。ガラスの粉を付
けて、形を整えれば完成です。

始めは溶けたガラスのあつかいや、燃え盛るバー
ナーの炎にとまどっていた参加者の方々も、出来上
がったトンボ玉を見ると満足そうな表情。

これを機会に古代の技術や歴史に興味をもってい
ただければ、埋蔵文化財センターの職員としてこれ
程嬉しい事はありません。

これらの行事はまだ今年始まったばかりですが、
参加された方々のご意見を参考に改善を重ね、今後
も続けていきます。

体験も含めて歴史を学びたいという方は、ぜひ東
京都埋蔵文化財センターにお越しください。（武内）

府中市朝日町神明台遺跡

所在地：府中市朝日町三丁目16番地

調査期間：2011年7月～12月・2012年5月～7月

調査面積：4,670㎡（本調査）・1,800㎡（確認調査）

朝日町神明台遺跡は、調布市・三鷹市・府中市にまたがる調布基地の跡地に所在し、北側の国分寺崖線（野川左岸）と南側の府中崖線（多摩川左岸）の間に広がる立川段丘面に立地しています。今回の調査は、警視庁第七機動隊庁舎移転新築工事に伴うもので、これまでの周辺遺跡の調査成果を元に、調査範囲の南側約1/4を全面発掘による本調査、北側約3/4をトレンチによる確認調査として実施しました。

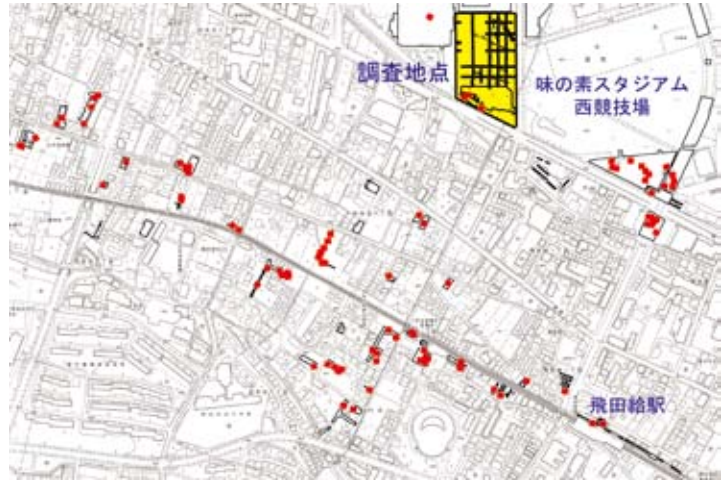
調査では、旧石器時代・縄文時代・古墳時代終末期～古代・近世の遺構・遺物に加え、調布飛行場の外周水路跡も確認されました。

旧石器時代では石器集中部2カ所のほか、剥片・破片が単独で出土し、ナイフ形石器・角錐状石器・石核・敲石などが見つかっています。これらの石材には、黒色頁岩・ガラス質安山岩・チャート・砂岩が利用されています。また縄文時代では、土坑2基・集石（焼石を用いた蒸し料理施設）3基が検出され、中期（約4,500年前）の土器や打製石斧が出土しています。

古墳時代終末期～古代では、7世紀末葉～8世紀前葉の竪穴建物跡3軒・焼土跡1基が検出され、須恵器・土師器・土製支脚・鉄鎌・不明銅製品などが出土しています。建物跡の規模には、一辺3m程度のものと6m程度のものがありますが、3軒とも北壁にカマドをもち、柱穴は検出されませんでした。また、カマド周辺から遺物がまとまって出土した建物跡もありました。調査区周辺には、この時期の竪穴建物跡が点々と広がっており（地図参照）、武蔵国府成立直前の集落の様相を知る大きな手掛かりとなります。

近世では土坑4基・溝跡30条・畝状遺構（畑跡）2基が検出され、磁器・陶器・土器・金属製品（鉄釘・煙管吸口）などが出土しています。溝跡は現在の旧甲州街道に平行あるいは直交しており、この道に沿って土地の区画が行われたものと考えられます。

このほか、太平洋戦争中に使用された調布飛行場の外周水路跡をはじめ、土坑・ピットが見つかっています。水路跡には、航空機からの発見を防ぐためのタールによる迷彩が施されています（写真の玉石が黒くなっている部分）。また遺物では、戦時中の統制経済下で生産された「統制陶磁」が出土しています。（五十嵐・大西）



調査地点の位置 (1/12,500)

赤印は古墳時代終末期～古代の住居跡が発見された地点を示す



古墳時代終末期～古代の竪穴建物跡



調布飛行場の外周水路跡

ぶらり旧石器さんぽ Vol. 2

池のまわりの遺跡 武蔵野市・三鷹市井の頭池遺跡群ほか

「ぶらきゅう」シリーズでは、東京都内の旧石器時代の遺跡を訪ね、旧石器時代人がどのような場所に暮らしたのか、それぞれの土地の起伏などの地形と景観の復元を通じて、紹介していきます。

武蔵野の池 東京の武蔵野台地上にはいくつもの池があり、まわりを公園に整備して憩いの場になっています。特に、23区と北多摩の境、三鷹市、杉並区、練馬区付近にはこうした池が集中しています。

武蔵野市と三鷹市の境にある井の頭池、杉並区の善福寺池、練馬区の富士見池・^{さんぼうじいけ}三宝寺池などがそれです(図1)。なぜ池が集中しているかという、武蔵野台地は西から東へ向かって傾斜しています。ちょうど、23区と北多摩の境あたり、標高50mの付近で地形の傾きが変わります。その変わり目で地下水が地上に湧き上がり、池ができるからです。現在では湧き水が枯れて人為的に注水している池もありますが、元々は地下からの湧き水がいつも満ちていました。

池のまわりの遺跡 池の周りには、旧石器時代の遺跡が多く分布します。特に、井の頭池と富士見池



井の頭池畔から台地上の井の頭遺跡群を望む
木陰に見える住宅のある面が台地上。遺跡がねむっている。

では顕著です。井の頭池遺跡群が最も大きい遺跡ですが、当センターでも富士見池のまわりで富士見池北遺跡を発掘しています。

旧石器時代の人々は、湧き水と、湧き水に集まる動植物を暮らしの糧にします。湧き水の湧く池は、旧石器時代の人々にとって最も住みやすい場所のひとつだったのです。とは言え、池のすぐほりには遺跡はありません。池とまわりの台地の間には約5~6mの高低差があり、その台地上の崖に面したところに遺跡が並びます(図2・写真)。池のほりは川の増水などで水につかる可能性があり、安定的ではありません。

池のまわりはおおむね閑静な住宅地になっており、開発に伴う遺跡発掘はあまり行なわれていません。住宅の下に、まだ多くの旧石器時代の遺跡がねむっています。(伊藤)



図1 武蔵野の池

武蔵野台地を流れる神田川、善福寺川、石神井川の upstream、源流に池がある。神田川の南側、仙川の上流にも丸池という池があり、旧石器時代の遺跡がある。

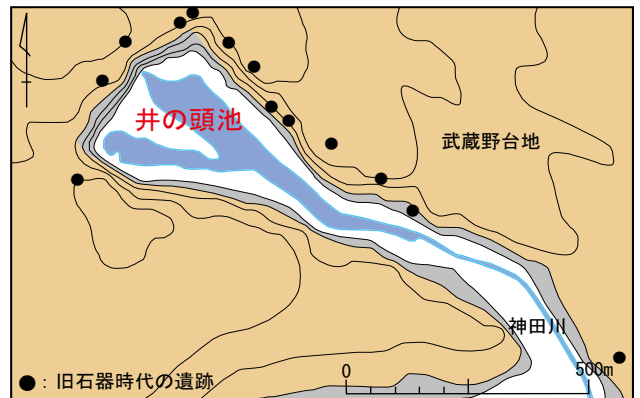


図2 井の頭池とまわりの遺跡

井の頭池のまわりに5~6mの崖が巡っていて、主に北側の崖上に遺跡がある。

続

大江戸 掘りものの帖 ～ 2 ～

薩摩焼の植木鉢をめぐって 一文京区春日二丁目西遺跡の調査から一

文京区春日にある国際仏教学大学院大学の校地では、建設に先立って春日二丁目西遺跡の発掘調査が実施されました。調査の概要は『たまのよこやま76』に「遺跡だより88」として既に紹介しましたが、台地突端の斜面地に位置する眺望の開けた敷地は、江戸時代には越前丸岡藩本多家を皮切りに大名屋敷として変遷を重ね、明治後期には徳川慶喜が晩年を過ごした地でもあります。今回はこの遺跡の出土遺物から、都内の江戸遺跡でも希少な薩摩焼の植木鉢と思われる遺物を紹介します。

「薩摩焼」といえば、絢爛豪華な金襴手を思い浮かべる方もいることでしょう。写真の陶器は口径・器高とも30センチ弱、一抱えほどの小振りな甕形の器です。底部付近を失っていますが類例から植木鉢と判断しました。肥厚な口縁部に一定の間隔で指で摘んだように波状の口縁が作出されますが、全体として装飾性に乏しく、一見して地味な印象を受けます。しかし、波状の口縁形態など他の窯業地の製品とは異なる特徴から、鹿児島大学の渡部芳郎教授らにより薩摩焼の苗代川産との推定に至りました。

年代的には判然としない部分を残しますが、共存する遺物からみると18世紀末から19世紀前半頃の可能性が想定されますので、当時の拝領者は相模荻野山中藩大久保家とみて間違いのないでしょう。

この頃、江戸市中では広く庶民層にまで鉢植植物栽培の流行が浸透し、園芸文化が花開いていました。



薩摩苗代川産の鉄釉植木鉢（68号遺構出土）

これを反映して遺跡からは18世紀後葉には定型的な量産品としての植木鉢が出現し、時代が下ると共に出土量が増大する傾向が見られます。にもかかわらず、薩摩焼の植木鉢は報告時点では都内唯一の出土事例でしたし、渡辺教授の最新の調査成果でも僅か5例を数えるに過ぎないのです。

類例が出土した豊島区染井遺跡2例・同雑司が谷遺跡、新宿区三栄町遺跡は、いずれも植木屋など生業としての植物栽培との結びつきの強さが注目されます。植木鉢の種類は植木屋の業態や地域によって偏りがあり、得意とする栽培・販売植物のあり方に左右されることが遺跡の調査から窺えます。しかしその偏りも、今戸など江戸在地の土器や瀬戸・美濃産の陶磁器など、江戸遺跡で頻出する特定の量産品の範疇に収まります。薩摩苗代川産の製品は大型日用陶器が主力製品ですが、遠く江戸においては植木鉢が一般的な流通品ではなかった可能性を、出土量の少なさは示唆しているといえましょう。

こうした視点から、苗代川産植木鉢自体は商品として江戸に流通したとは考えにくく、むしろ稀少な苗木のコンテナ（運搬容器）として持ち込まれたと見るのが妥当ではないでしょうか。渡辺教授も薩摩焼の藩外流通を考える上で、極めて重要な遺物であると指摘されています。

薩摩藩といえば、本草学に造詣の深い8代藩主島津重豪が、既設の山川・佐多の両薬園整備に加え安永8年（1779）には新たに吉野薬園を設置していますが、出土遺物の年代観が三薬園の整備後の時期に符合する点が意味深長です。考古学的には出土遺物の中身を語るのは難しいものですが、植えられていた苗木がいかなる種類のものだったのか、とても木になる…いや、気になるところです。（大八木）

*この遺跡の報告は、当センター調査報告第237集として2009年に刊行されています。

<参考文献>

渡辺芳郎 2012 「近世薩摩焼の生産と藩外流通」『江戸遺跡研究会会報』No.133 江戸遺跡研究会

縄文人とお酒

平成24年度 年間展示解説シリーズ その2

今年度は「縄文人の食事」について年間展示を行っておりますが、もうご覧いただけましたでしょうか？

縄文人の食生活を紹介する様々な展示の中には、なんと、お酒に関するコーナーもあるのです。そこで、今回は「縄文人とお酒」について書いてみたいと思います。

昔から、縄文時代にお酒があったのか？ということについて、いろいろ考えられてきました。縄文時代中期の「有孔罎付土器」は酒造りの土器である、という説をご存知の方もおられることでしょう。土器の口の部分を一周するように開けられた小さな孔。これが、お酒を造るときに生じるガス抜きの孔である、ということが論拠です。ただし、発掘調査から酒造りを立証する具体的な資料は見つからないままでした。

ところが、かの有名な青森県三内丸山遺跡で、ニワトコ属やヤマブドウ、ヤマグワといった果実を使って酒造りを行っていたことを窺わせる資料が発見されました。まとまって出土した大量の果実の種に混ざって、発酵した果実に卵を産み付けるショウジョウバエのサナギが見つかったのです。このことはこれらの果実が発酵していたことを示しており、その目的は「酒造り」であったと考えられます。

また、東村山市下宅部遺跡では、ニワトコが炭化して内面に残っている土器が発見されています。発酵させている途中だったのでしょうか。

さらに秋田県池内遺跡では、植物繊維に包まれて塊状を呈するニワトコ属の種子が発見されています。“植物繊維を重ねて果汁をしぼった”あるいは“果実を発酵させて出来上がったお酒を濾して種を取り除いた”というように推測されます。

このように、三内丸山遺跡、下宅部遺跡、池内遺跡の発見例から、縄文人はニワトコ属の果実を使って発酵させていた可能性が強いことが分かってきたのです。もしかしたら、ワインのような果実酒だったのかもしれない。

また、縄文時代には注ぎ口のついた、注口土器と呼ばれる土器が発見されることがあります。煮炊きの痕跡はありません。やかんや急須にそっくりな形状から、液体を注ぐための土器と考えられます。もしかしたら、これでお酒を注いでいたのかもしれない。

とは言っても、この種の土器は、あまり多く発見されることがありません。日常生活で使われた土器ではなく、お祭りの日などの特別な機会に用いる土器だったのでしょうか。

三内丸山遺跡から発見された果実の種、下宅部遺跡で発見されたニワトコが付着した土器、多摩ニュータウンで出土した注口土器や有孔罎付土器は、来年3月10日まで当センターで展示されています。

期間限定！！ですので、是非一度、見にいってしゃいませんか！
(鈴木)



有孔罎付土器



注口土器

多摩ニュータウンNo. 359 遺跡とNo. 563 遺跡は、樹枝状を呈する多摩丘陵の尾根から急峻な谷斜面にかけて連続する遺跡です。京王相模原線南大沢駅の南側、現在の八王子市南大沢 10 丁目 4 番及びその北側を通る大通りにありました。大栗川の支流太田川の上流域に位置し、九段甫谷戸の東側に形成された南北に走る小支丘の標高 156 m の尾根上から標高 137 m の谷斜面にかけての高低差 19 m に及ぶ範囲を調査しました。深い谷を埋め立てて平らにした造成地にポッカーリ浮かんだ島のように取り残されていた遺跡地は、平坦部がほとんどない痩せ尾根から谷底に向かって斜面が広がり、傾斜がとても急で、しっかりと踏ん張っていてもずり落ちてしまう程でした。

発掘調査は、昭和 55 年 (1980) と昭和 56 年 (1981) の 2 度にわたって行い、密接な関係にある遺跡として両遺跡と一緒に調査しました。調査面積は、9,050 m²で、旧石器時代のナイフ形石器 1 点、縄文時代では竪穴住居跡 1 軒、竪穴状遺構 1 基、陥し穴土坑 10 基、集石 8 基、焼土 4 基と早期後半から中期前半の土器・石器が、古代では竪穴住居跡 4 軒、土坑 1 基、埋設土器を伴う土坑 1 基と土師器・須恵器・灰釉陶器や置きカマド、近世以降では井戸 1 基、炭焼窯 2 基と陶磁器や砥石、銭貨 (寛永通寶) が検出されました。縄文時代の竪穴住居跡と竪穴状遺構は、前期後半に位置付けられ、中部地方や近畿地方との関係を示す土器も出土しました。

4 軒の古代の住居跡は、出土した土器の様相がほぼ同じで、平安時代中期の 10 世紀中頃から後半に形成された小規模な集落であったと考えられます。

拠点集落が解体され、それまであまり開発の及んでいなかった谷戸奥にまで集落が進出したことを示しており、多摩ニュータウン地域の開発史上、画期的な出来事であったに違いありません。こうした丘陵奥部における開発と小規模集落の形成は、ついでの前まで多摩丘陵でみられた谷戸集落とそれを取り巻く景観の原風景であったと言えます。

古代末期は、弥生時代に比べ温暖となり水田経営に好適であったと同時に、手工業生産も活発となり、領主等が農地だけではなく丘陵部の開発にも積極的に取り組むようになった時期です。

そうした地形的、社会的環境のもと、本遺跡とその周辺の人々は、谷戸の水田開発や畑作ばかりでな

く、狩猟や馬の放牧、粘土採掘や土器生産など、丘陵の資源を積極的に開発、利用していたと想像されます。

出土した土器のうち、「く」字状に張り出す台状底部を特徴とする土師器の坏は、多摩ニュー

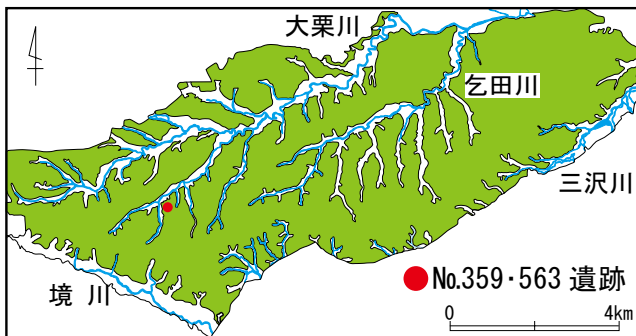
タウン地域でも西部の境川流域に分布の主体を持つ地域色が強い古代末期の土器で、その様相を初めて明確にした記念すべき資料です。

本遺跡の調査成果は、東京都埋蔵文化財センター調査報告第 1 集第 3 分冊と第 2 集第 2 分冊に収められています。(江里口)

1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964 ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

10・11 多摩ニュータウンNo. 359・563 遺跡



多摩ニュータウンの遺跡



古代の竪穴住居跡 [1号住居跡]



多摩ニュータウンNo. 359・563 遺跡遠景



古代の土師器坏

収蔵庫から

有舌尖頭器 その4 (最終回)

縄文時代草創期に出現したこの有舌尖頭器という石器が、その後続く時期に引き継がれず、どうして消えてしまったのか明確な理由は判っていません。ただ、この時期に有舌尖頭器と石鏃(矢じり)が併存していたと仮定した場合、その謎を解き明かすヒントがそこに隠れているような気がしています。

皆さんもご存じのように、有舌尖頭器も石鏃も狩りをするための道具、狩猟具です。石鏃は弓と矢(矢柄)があってこそ、その機能や威力が発揮できる石器です。矢の先端に石鏃を装着し、弓と弦で弾いて飛ばします。矢には矢羽根が付いているので、空気抵抗によって石鏃が先になって目標物へ向かっていくと考えられています。

一方、投槍としての有舌尖頭器も柄と投槍器(投擲具の呼称もある)がなくてはならないものでしょう。柄の先端に有舌尖頭器を装着し、柄を投槍器にあてがい腕を振って投げ飛ばします。長い柄が空気抵抗を生み、矢羽根状のものがなくても有舌尖頭器が先になって目標物へ向かっていくこととなります。ただ、これには条件があります。前回お話したように、石器そのものの重さが必要になってくる、という事です。石鏃の場合、矢に矢羽根が付いているので小さくても軽くても、飛行姿勢が崩れる事はまずありませんが、矢羽根のない有舌尖頭器の場合は柄とのバランスが崩れたら、飛行姿勢を保つことは難しいと思われる。

さて、ここでまた新たな疑問が生じてくるのです。それは、有舌尖頭器と石鏃が付属する道具類やそれぞれを飛ばす方法に大きな違いがあるにも関わらず、機能自体にはそれほど大きな違いがみられないということです。

双方とも狩猟具とされているものですから、もし、狩りの際に投槍と弓とを同時に用意することができたら、どちらを使うのでしょうか。何らかの条件や制約に合わせて、選択していたのでしょうか。

かつて、オーストラリアのアボリジニは障害物の少ない広い場所で長い柄の投槍を使ってカンガルーなどを狙い、イリアンジャヤ(現インドネシアパプア州)の先住民は、森や林などの茂みの中で弓を使って樹上のサルなどを獲物としていました。このような民俗事例から、氷河期から徐々に温暖化して変容しつつあった日本の当時の自然環境下では、次第に長い柄のものから短い柄のものが有利となり、そのために有舌尖頭器そのものを小型化し改良したのではないかと、そして、有舌尖頭器が小型化した時期のその製作工程と石鏃の製作工程が、ある段階まではほぼ同じであるという事も双方の同時存在を窺わせ、さらには一方がやがて消えていく一因になったのではないかと考えられるのです。

おそらく、初現段階の石鏃は正三角形あるいは二等辺三角形の剥片の周縁に、簡単な調整を加えただけの抉りのないものであったと想定されますが、それに対して小型の有舌尖頭器は、菱形の剥片の周縁調整後にさらに舌部を作出するという、もうひと手間かかると手間がかかる石器です。同じ機能を持つ石器ならば、手間のかからないものを選択するのが人間ではないでしょうか。

人間は「楽をしたがる」動物です。楽がしたいから「どうしたら楽できるか」を懸命に考える。遠くまで歩く事が大変だから、荷物が重いから、といろいろなものを考え出す。コンピューターも同じです。面倒な計算を一気に済ませることができる機械を考え出したのです。

縄文時代草創期は、旧石器時代から縄文時代への過渡期と言われていますが、とても重要な時期なのです。その時期に出現した有舌尖頭器は、温暖化していく当時の環境と、そこで生活した人間の要求の変化によって小型化し、最終的には石鏃と同じような使われ方がなされた、「特徴的」な石器として捉える事ができるのです。そして、様々な環境的条件やより簡易的に作ることができる石鏃(無莖)との競争の中で淘汰され消えていったと考えられるのです。(並木)

「たまのよこやま」の由来 万葉集巻二十之四四一七の防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 90

2012年10月15日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>